

メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第49号

[2013年2月号]

メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。
JAM 会報メール第49号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ/ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へJAMの最新の活動をほぼ毎月中～下旬ごろ会報メールにて発信いたします。
今後ともどうぞよろしく願いいたします。

<目次> [ページ]

メソトマンスリー	[2]
国内から	
・ 難民申請者	[5]
国際保健医療協力のなかで (19)	[6]
編集後記	[8]
次号の予定	[8]



メソトマンスリー

初めての音楽による交流事業を開催する事が出来ました



【メソト=田畑 彩生】

今井記念海外協力基金、タイ教育省、メータオ・クリニックの皆さまのご支援を頂き、音楽による初めての学生交流事業を開催する事が出来ました。私どもの活動に賛同し、リコーダーなど楽器をご寄付頂きました橋本様にも厚く御礼申し上げます。

合同演奏会当日は、タイ教育省より来賓を迎え、4校の学生の約100人が演奏をしました。校舎の窓からも、CDC校の学生が顔を出し、会場は観客で埋め尽くされました。本年度の合同演奏会に参加して下さった3校のタイの学校の皆さんも緊張した面持ちです。

タイのポプラ校からは、タイの伝統楽器の演奏、剣の舞を披露されました。タイのサッパ校からは、タイの南北伝承音楽を演奏して頂きました。



CDC校の学生さんは、カレン民族の伝統的な舞踊と歌唱を披露。

タイのメク校からは、学生バンドのメンバーが訪れメーソートで流行の音楽を披露され、各演目に会場は盛り上がりました。

それぞれの地域、民族の音楽の全てが趣き深く、大変素晴らしい演奏をご披露頂きました。



タイ-ビルマ（ミャンマー）学生合同演奏では、緑色のシャツを着た移民学校 CDC校の学生が

舞台上並び、太鼓とリズム楽器にも CDC 校の学生がタイの学生に混じり演奏。同じリズムを皆で感じて、互いの音色に耳を澄まし、ひとつの曲を作り上げる為に真剣な学生に、会場も集中して聞き入ります。曲が終わるや否や、会場に大きな拍手が響き、歓声があがり、フラッシュが光りました。



小太鼓、シンバル、金管楽器とリコーダーのハーモニーは国境を越えた友情の証のように心に響きました。タイの学生さんと移民学校 CDC 校の学生さんが誇らしそうに一緒に笑う姿は、印象深く胸に刻まれました。

ちょうど2ヶ月前の12月、初めて見る音符とリコーダーに瞳を輝かせてくれた移民学校 CDC 校の学生さんは、今回、立派に小曲集のメドレーをタイの学校のブラスバンド部の学生さんと共に演奏しました。

毎日リコーダーを学校へ持参し、休み時間にも練習していた CDC 校の学生の皆さん。上達の速い学生は、友人の中で教え合い助け合っている姿を良く見かけました。合同演奏の課題曲の音色は、朝は早くから日が沈む頃にもメータオ・クリニック近くの学生寮から聞こえて来ました。また、タイの学生さんとの交流練習会では、お互いに初めは、はにかんでいましたが、徐々に打ち解け、演奏後には「さよなら、またね。」と挨拶をする様子もありました。カレンの伝統織物のカバンをさげたタイに長年住み、生まれ育ったタイカレン民族の学生さんが合同練習会に度々参加し、CDC 校のビルマ（ミャンマー）・カレン民族の学生さんがさげたカレンの織物カバンと同じだと見せ合う様子も有りました。

長らく両国境周辺地域に住まいしているカレン族の皆さんは、今はタイとビルマに国境は隔てても、伝統の織物や技術は受け継がれているのですね。この瞬間は、タイとミャンマー（ビルマ）の学生が互いの共通点を見いだした瞬間です。この相互理解は、タイコミュニティーの移民・難民の受け入れにとって非常に大切な瞬間であると感じました。この相互理解を生む瞬間を増やしていきたいと胸が熱くなる思いでした。

そして、私にとってそれは同時に、同じ民族でも生まれた国が違う事による栄養・発育状態、教育・保健医療の受益にこの様にも差が生まれてしまうものなのかと目の当たりにする苦しい、複雑な思いにかられた瞬間でもありました。そして「この差を小さくしていきたい。」そう心に思いました。

はじめは、資材置き場と壊れた物置であった音楽用の教室は、訪れる度に CDC 校学生と先生の皆さんで少しずつ整頓、清掃されていきました。今では大きな会議やテストなどにも使用される大切な部屋へと変貌をとげました。音楽の先生が、学生の為にと楽器用に整えられた棚も出来上がりました。この部屋は現在、CDC 校ブラスバンド部へのトランペット演奏指



導と譜読み指導、低学年の学生さんの立てた目標曲の継続指導に使用されています。来年の合同演奏会では、金管楽器のパートもタイの学生さんと一緒に演奏出来る事を目標に、先生も学生さんたちも練習に励んでいます。

今回のこのような素晴らしい機会を与えて下さった皆様、ご支援頂きました皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございます。どうぞ、今後とも事業が継続されます様、移民学校の先生や学生さんへのご支援、応援を宜しく願いいたします。

きょうのゆめ



【メソト=前川 由佳】

今日の主役は、中央滅菌室(Infection Control Unit:IPU)のマネージャー、サトウンさん、42歳です。

クリニックで働き始めて5年目。滅菌室開設時からマネージャーとして、院内感染管理チームのリーダーとしてJAMスタッフと共に活動しています。真面目さと几帳面さはクリニック1。院内感染活動のパートナーとして無くてはならない存在です。

ヤンゴン出身。1988年の民主化運動を受けて多くの学校が閉鎖してしまったため、私立の学校を探し入学。6ヶ月の看護助手コースを受けた後、ヤンゴンの診療所で看護助手として16年もの間働いていました。その後、続く国内での不安定な生活から逃れるため、第三国定住を考え難民キャンプへ。しかし、難民キャンプでの新規登録はすでに行っておらず、クリニックにて働くこととなりました。クリニックに従事しながらも、その真面目さから、移民学校の先生に抜擢されたりもしました。

将来の夢は

メソトより北にある国境の町メーホーソン。その国境の向こうにあるタチレーという町で、日中はバスの運転手、夕方になれば鳥や豚、庭園のお世話をする、そんなのんびりな生活を家族と共にすること。

食事、ジュースでさえも食す前には必ず神への祈りを捧げるサトウンさん。平和を願い、全てに感謝し、穏やかな生活を望むその人柄から、穏やかな夢を聞き、深く納得しました。

ただ、正直なところ、難民登録が出来るのならば海外に行きたいんだ。それは、5歳になる息子のため。やっぱり海外で少しでも高いお給料をもらい、生活を楽しんで、いい教育をしてあげたい。サトウンお父さんのもうひとつの夢でもあります。そんなお父さんの愛を一身に受けて、クラスの誰よりもおっきな身体の息子ジョンソウくんの夢はお医者さんになることです。





滅菌室にてサトウンさん



5歳になる息子ジョンソウくんと。

国内から

難民申請者

【東京＝高澤 彩】

こんにちは。会計を担当させて頂いております、高澤です。いつも JAM へご支援いただきありがとうございます。

ご存じのとおり、長く続く紛争、不安定な社会環境の影響で、タイのミャンマーとの国境沿いには今もなお、多くの難民・移民が生活をしています。タイ社会の中では身分が不安定だったり、生活に必要な基本的な社会サービスを受けることが難しかったりと、安心して生活を送ることはやはり困難です。

ところで、日本でも、人種、宗教、国籍、政治、貧困問題などの理由により自国を去ることを余儀なくされた人々が多く生活していることをご存じでしょうか。

近隣のアジア諸国に限らず、中東、アフリカなど、出身は様々です。その多くは、難民として認定されるべく、日本政府に対して「難民認定申請」をし、難民条約に基づいた認定審査を待つこととなります。

条約難民として認定されると、①1年～3年の更新可能な定住資格が与えられる、②難民旅行証明書が発行される、③日本国籍を持つ人/一般外国人と同様の社会サービスが受けられる、といった効果があります。

ですが、申請者がその審査を待つ期間の生活は極めて不安定です。

まず、自活の手段が限られること。就労資格を持つ人もいますが、申請者の多くが就労資格を得ることが出来ない身分にあり、就労すれば罰則の対象となります。(もちろん、生活のため致し方なく違法に就労する人もいるでしょうが。) 難民申請中、公的金融支援の申請をす



ることも可能ですが、人ひとりが生活するためには決して十分な金額とは言えず、支援にも限りがあります。また、中には、正規の滞在資格を持たないため、雇用を躊躇されたり、国民健康保険に加入できなかつたり、銀行口座の開設ができなかつたり、部屋を借りることができない人もいます。

また、日本語のハードルも無視できません。手段はさまざまですが独学、地域ボランティアクラスでの受講など。

そして難民申請の結果待ち。1回目の審査は申請から6ヶ月以内にするという基準が設けられています。不認定の場合は異議申立てを行うことが可能ですが、審査期間の基準は設けられておらず、中には数年に亘り結果を待ち続けている人もいます。

住み慣れた土地、家族、友人と離れ、全てが自己責任で片づけられがちな日本の社会で生きる難民認定申請者の人々。

「日本で一番大変なのは、人との繋がりがいいことかな……。繋がりがあれば、困ったときは相談して、アドバイスもらって、前に進めるけど、日本にはそんな家族や友人もない。」「日本人は、自分は自分、人は人でしょ。何でも全部自分でしなきゃいけない。誰も助けてくれないから。」と、人との関わりを失い、中には精神的に追い詰められてしまう方もいます。

難民申請者の人々が自国へ戻れるようになるのが一番ですが、一方で、日本人の多くが普段不自由することがない場面で躓いている人もいて、ということにまず気を留め、誰にとってもより生活しやすい社会にしていけたらいいなあ……。と思う毎日です。

国際保健医療協力のなかで (19)

【東京＝小林潤】



東南アジア学校保健国際研修コースへMTCから参加

2月13～20日まで、ラオス国ビエンチャンで開催された第2回の東南アジア学校保健国際研修コースにメータクリニック(MTC)・学校保健ユニットからヌソ・マンウイーさん、ビルマ移民学校の一つCDC(Child Development Center)からサントーンさん、メーソット地区を管轄するタイ教育省のスーパーバイザーのマニダさんの3人が国際学校保健コンソーシャム(JC-GSHR:<http://www.tn.nagasaki-u.ac.jp/schoolhealth/schoolhealth.jp/>)の招聘によって参加されました。

研修コースはアジア11か国から教育省・保健省の学校保健プログラムマネージャーや国連等の開発パートナーの担当者が参加し、学校保健の知識・技術だけでなく国の政策策定と実施マネジメントについて活発な学習と討議が行われました。

このなかメーソットから参加した3名は当初戸惑いをみせていましたが、研修が進む中で他国の参加者とも積極的に議論をするようになっていきました。最終日には、ビルマ移民学校群の水と衛生の対策に関してのアクションプラン(活動計画)を作成し発表されました。内容は他国レベルの発表と比較してもひけをとらないもので、3名に国際的に認知される修了証が渡されることになりました。

国際的研修で最新且つトップレベルの情報が吸収されたことのみならず、今回MTCとタイ教育省の担当者が共に移民学校の学校保健実施についてじっくり考えて実際にアクションプ



ランを作成したことは大きな意義があったと思っています。現在 JAM では今井海外協力基金からの支援を得て、タイの学校と移民学校との音楽交流事業を進めていますが、このような文化的交流とともに、学校保健事業を切り口にタイ政府の認識のもと教育システムのなかで移民学校が認識・位置づけられていくことが重要と考えています。すなわち、これらの交流が移民学校の存続・継続的発展につながり、最終的には児童の進学や就職にチャンスがひろがり、将来に希望をもてることにつながってくる可能性を探っています。

この研修コースは橋本イニシアチブ（橋本元首相が1997年に寄生虫対策の国際的対策についてG8サミットで提言した）のもと、タイ国マヒドン大学熱帯医学部に設置された国際寄生虫対策アジアセンター（ACIPAC）において国際協力機構（JICA）の支援にて2000-2004年まで展開されていた研修コースが基盤になっています。JICAの支援が終了して、学校保健を基盤とした寄生虫対策から学校給食や栄養教育等の最新の課題に対応する国際研修の再開が年々望まれてくる中、国際的パートナーとともに昨年再開されたものです。2010年にJC-GSHRが日本のシンクタンクとして結成されましたが、JC-GSHR 理事長の小林が学校保健を国際的シンクタンクとしてリードしている Partnership for Child Development (PCD) のテクニカルアドバイザーに就任、さらにマヒドン大学熱帯医学部の学校保健コンサルタントとして招聘されたこと等を機に、学校保健全般を扱う研修コースとして国連機関や各国関連ドナー支援のもと昨年より再開されたものです。

昨年の第1回の研修コースには11月に来日もしたMTC学校保健部門の前主任ターウイン氏が参加し、移民学校の学校保健の実施成果や必要性そのものが国際的にも認知されることになりました。

ところで実は、私のMTCの学校保健ユニットへの支援は橋本イニシアチブでのプロジェクトでの支援がきっかけだったのです。



(写真上：左から ヌソさん、筆者、マニダさん、サシトーンさん)



ホスト国ラオス教育省の初等教育局局長から修了証書をわたされる3人



